

2016年度第1回歴史研究部会研究会のお知らせ

会員各位

下記の内容と日程で、歴史研究部会の研究会を開催いたします。現在、大学院に在籍している若手研究者から、現在進めている研究内容をご発表いただきますので、よろしくご参集ください。なお、非会員含めどなたでもご自由に参加いただけますが、準備の関係上、参加希望の方は8月24日（水）正午までに氏名、所属 or 肩書、メールアドレス、会員・非会員の別をご記入の上、木村智哉（kimura_t1980@yahoo.co.jp）までご連絡ください。皆さまのご参加をお待ちしております。

●日時：2016年8月27日（土）14時30分～17時30分

発表1：「トーキー導入期におけるプレスコとアフレコ——アニメーション史と映画史を参照して」

萱間隆（専修大学大学院）

（概要）

アフレコ（アフターレコーディング）は「アニメ」特有の技法とみなされているが、これまであまり論じられていない。一方、数少ない先行研究では、プレスコを用いる欧米のアニメーションとアフレコを用いる日本のアニメーションとを対照させる、比較文化論が展開されている。しかし、日本でアフレコが主流となったのは、ここ半世紀にすぎない。そこで本発表では、単純な比較文化論を避け歴史的な観点からプレスコとアフレコについて考察する。そもそも、アフレコという言葉は無声から有声への転換が起こったトーキー導入期の映画業界で生まれた。しかし、映画やアニメーションの制作者がアフレコを好意的に用いることはほとんどなかったのである。では、なぜアフレコは嫌悪されたのだろうか。また、政岡憲三や J.O.スタジオはアフレコ以外にどのような方法で音声を収録したのだろうか。これらの疑問を当時の映画雑誌の言説を元に考える。

発表2：「声優史の暗礁——放送劇団とテレビ人形劇を中心に」

小林翔（京都精華大学大学院）

（概要）

本発表では、主に1950～60年代においてNHKを中心に児童向け番組として放送されていた人形劇に焦点を当てる。「チロリン村とくるみの木」や「ブー・フー・ウー」といった作品ではキャラクターの音声をNHKの放送劇団所属の俳優が主に担当している。彼らは戦前から戦後にかけてラジオにおいて放送されていたオーディオドラマに専従する俳優として養成され、今日における声優のはりしりとして位置づけられている。戦後の放送メディア

において、声優の活動領域は音声表現のみによって構成されるラジオドラマから、実際の俳優の身体を伴う外国映画の吹き替えや、図像による身体を伴うアニメキャラクターへの声あてといった、視覚表現と音声表現の交差する場へと遷移してゆく。そうした表現の混交は、音声表現の帰属先としての身体という問題を生じさせ、表現の前提としてリップシンク等の技術的な制約が加わることとなる。そうした表現の変遷において、人形劇という形式が経由され、視覚表現との架橋において果たした役割について考察する。

コメンテーター：西村智弘（東京造形大学非常勤講師）、谷川建司（早稲田大学客員教授）

司会：木村智哉（明治学院大学非常勤講師）

●会場：学校法人桑沢学園渋谷校舎（桑沢デザイン研究所）7F

東京造形大学サテライト教室

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-4-17

●交通アクセス：

◎JR山手線、埼京線・湘南新宿ライン／京王井の頭線／東急東横線、田園都市線／東京メトロ（地下鉄）半蔵門線、銀座線、副都心線「渋谷」駅ハチ公口から徒歩約10分

◎JR山手線「原宿」駅表参道口から徒歩約7分

◎東京メトロ（地下鉄）千代田線「明治神宮前」駅1番出口から徒歩約7分

●地図：<http://www.kds.ac.jp/smenu/access.html>